

秋風や殺すにたらぬ人ひとり

西島麦南

うわっと声をあげそうになるくらい驚かされた句。なんて率直であることか。この独白が詩になるのは、やはり「季語」の力なのだろうか。

何か書けば何か失ふ冬机

長谷川秋子

この問題は、多くの俳人が詠んできたものではないだろうか。私もこれを書いて何かを失ってしまうだろうか。「一命に長短はなし螢の夜」も共感できた。そして「秋風や書かねば言葉消えやすし」(野見山朱鳥)、これもまた真。物事の表裏一体を教えてもらう。対人関係の薄い自分の人生に、読んできた句集は沢山の示唆を与えてくれた。

かなしみも余裕の一つ葱坊主

大木あまり

落ち込んでいるときに救われた一句。余裕があるからかなしめるのかと。余裕があることを、誇りに思うことができた。

枯野行くわがこころには蒼き沼

木下夕爾

夕爾の俳句は淡くて暖かい。でも美しき寂莫がある。絵画や音楽に親しい感じがする。手当たり次第俳句本を読む中で、「添削」という言葉に出会う。「家々や菜の花いろの灯をともし」は久保田万太郎の添削であると。代表句が添削句ってどういうことなのだろうか？自己流も3年目、限界であった。

うごかざる一点がわれ青嵐

石田郷子

古い句集を読み終わった後、あいうえお順に現代の句集を読み始めて、石田郷子先生の句集に出会った。「うごかざる一点」という表現にしびれ、直観で決めた。2010年「棕」に入会、そして2011年あの大地震に遭遇した。内陸で地盤が良かったおかげで、何も壊れなかった。しかし「放射能」という目に見えないものと、1日中何度も起こる余震に精神が壊れかけた。そんな日々を支えてくれたのが俳句だった。1~2週間ごとに先生に句を送っていた。添削された真っ赤な原稿用紙が嬉しかった。今考えると紙上のセラピーだったような気がする。

関東に戻って来て3年、余震や「原発事故」というテレビ(特に地元局)をつければ聞かざるを得なかった言葉(音)から解放(何も解決していないけれど)されました。しかし、最近ふとした折に、福島を含む東北の風景が浮ぶのでした。あっという間の十年、そして再びの災禍。この先もきっと様々なことが起こるのだけれど、私はどんな俳句の世界を作っていけるのだろうか。